

Elizabeth Gaskellの魅力

中 村 祥 子

Elizabeth Gaskellの小説は今日どのように読まれているだろうか。最近欧米や日本でも再評価の大きな動きが出て、今後のGaskell文学の普及に大いに期待を抱かせるものがあるのだが、一般に文学史上の位置付けとしては、依然として、或る固定したイメージが払拭しきれていないように思われる。またGaskellの優れた多くの小説が、同時代の他の小説家達の作品の陰に隠されてしまい勝ちである。

しかし、特に短編小説を中心に、Gaskellの小説は日本でも少し前にはよく読まれていた。英語のテキストとして使われることもしばしばあって、学生時代に教室で読んだGaskellの作品をよく覚えているという人も多い。Gaskellの小説には、このように何十年も前に読んだものが、今なお印象深い読後感を残しているという、そういう作品が数多くある。

読者に与えるこの深い印象は、どういうところから出てくるのだろうか。それはGaskellが何を小説のテーマに取りあげているかということと同時に、そのテーマを設定する際のGaskellの姿勢に関わりがあると思う。以下幾つかのGaskellの作品を具体的に取りあげて、このGaskell独自の魅力の源を考えてみたい。

1

Gaskellの後期中編小説に‘Cousin Phillis’(1863-4)という作品がある。これは、イングランド北部のHeathbridgeという村の、Hope Farmという農場を舞台にしたもので、この農場の一人娘Phillisが経験する恋愛・失恋の物語である。特に背景になる四季の変化に富んだ自然描写や田園生活の描写は、Gaskellの喚起力のある筆づかいが高く評価されるところで、日本でも以前からよく読まれ、かつては幾つか翻訳も出されて、散文で書かれた田園詩とし

て愛読されてきたものである。日本に限らず一般に、'Cousin Phillis'の読まれ方としては、この小説の持つidyllicな側面が重視され、Phillisを通して示される純真な田園の生活が、その恋の相手となる、より広大な外部の世界からの侵入者Holdsworthによって、変化を被っていく過程が描かれたものと見做されている。

確かに'Cousin Phillis'における牧歌的な雰囲気は、この作品で大きなウエイトを占めている。そんなにも素晴らしいものが最後には破壊されるという点が重要であるために、詳細に綿密に描かれているのである。また作品構成の上でも、季節の移り変わりが、時間の推移と主人公達の心の変遷とを示す補完物としてうまく使われている。

しかし従来、'Cousin Phillis'の評価は、このような叙情的側面に焦点を合わせた分析がなされすぎてきた気がする。田舎の生活が何らかの形で都会の影響を被るというテーマは、古来幾つもの文学作品で取りあげられてきていると思うが、その誰にも馴染みのあるテーマが'Cousin Phillis'のような形で仕上げられた、つまり単なる'変化'ではなくて、'破壊'であると描かれたところに、Gaskellの特色が見られると思うのである。

先ずGaskellはこの小説の時代背景を1840年代に特定している。それは産業革命後のイギリス社会を最も典型的に示していると思われる鉄道狂時代で、当時の最先端産業の象徴である鉄道が、イギリス中に敷設されていった時期に当たる。物語では、ヒロインPhillisの住むHeathbridge村から少し離れた州都Elthamは、既に鉄道の通っている都市であり、そこから支線が延びて、Heathbridge村の近くのHornbyまで新たに線路が敷かれるという時点での出来事が扱われることになっている。この時代は全体として、それまでは田園地方であった所が、そこに工場ができたりその市場になったりして、何らかの形で産業都市や商業都市と直結させられたために、大きく変動せざるを得なくなったというような地域が依然として各地に出現しており、特にそれは40年代においては、この小説の舞台となるイングランド北部で顕著な現象であった。Gaskellはこの現象を、鉄道の支線が地方へどんどん延びていくという、非常に鮮明なイメージで作品に定着させたのだと言える。

物語は第三者Paulの視点から語られる。Phillisの遠い親戚に当たる語り手Paulは、この支線をかける鉄道会社の技師の助手である。こうして、村を一步も出たことのない世間知らずな娘のPhillisが対照的な世界と邂逅するその必然性が、当時の時代背景の中で準備されている。Paulはその職業のおかげで、さもなければ訪問することなど思いもよらなかったような遠い親戚を訪

ねることになり、それが更にPaulの上役の技師であるHoldsworthをPhillisに近づけることになるからである。

小説の舞台への、この導入の仕方には、Gaskellが'Cousin Phillis'において鉄道をどのように位置付けているかがうかがえる。鉄道の敷設は先ず鉄道会社側の意向によって——ということはその路線が収益をもたらすか否かによって——田舎の人々の意思とは無関係に、いや応なくどんどん田舎へと延ばされていくのである。それはPhillisがHoldsworthと出会う前から、「荒涼とした美しい土地を…突切っていく」¹⁾性質を持っている。

鉄道会社の主任技師であるHoldsworthの性格は、既にこの導入部において、充分読者に印象付けられる。それは都会的センスを持った、花形産業の職業人というものである。18歳のPaulは、自分と7歳程しか年の違わないこの主任技師が、自分とは多くの点で、特にその華やかさの点で異なっていることを強調している。その一方でGaskellは、PaulがHoldsworthを尊敬的にしているこの時点で、PaulがHoldsworthと付き合うのを苦々しく思っている、Paulの下宿先の人々をも登場させて、後の物語の展開への伏線にしている。

こうした性格付けをなされたHoldsworthが、Phillisに悲劇をもたらす直接の原因となるのは目に見えている。二人の間に恋愛感情が芽生えたかに見えた後、彼は先輩の技師に引き抜かれ、一緒にカナダで鉄道を敷く会社の仕事をするために、突然イギリスから去っていくことになる。その会社が出すとやっている給料が相当な額で、しかも将来の出世が保証されていて、そちらの方が彼にとって割の良い仕事だからである。更に、二年後には戻ってくるはずだったHoldsworthは、一年もしないうちにカナダで別の女性と結婚し、その通知がPhillis達のもとに届くことになる。

ここで、同じような物語の展開を示す一つの例として、John Galsworthyの*The Apple-Tree* (1916)を取りあげてみたい。これはやはり田園を背景に牧歌的な雰囲気を漂わせたロマンスとして、日本でもよく読まれているものである。Oxford大学を卒業したばかりの主人公Ashurstが、友人と二人で徒歩旅行に出かけ、膝を痛めてたまたま立ち寄った或る村の農家に、足の痛みのためにしばらく滞在することになる。彼は近いうちに法廷弁護士になるはずの前途洋々たる22歳の青年で、既に両親の遺産が年に400ポンドあり、この膝の痛み以外は差し当たって何の不安も悩みもない、という状態の若者なのである。彼はこの短い滞在中に、その農家の親戚の娘Meganと恋に陥り、或る日、Meganとの結婚の準備のためと称して久しぶりに近くの町へ出かける。が、Ashurstはその日以来村へは帰らず、結局別の女性と結婚することになる。

一方村に残されたままのMeganは、恋人が戻ってこないということがわかって、小川で入水自殺をするのである。

ここでは舞台となる田舎が、イングランド南西部のDevon州になってはいるが、都会からやって来たセンスのよい魅力的な青年が、農村の純情な娘の心と人生とを破壊していくというストーリーは、'Cousin Phillis'と非常に似通っており、従ってこれもまた、我々に馴染みのあるテーマを扱った小説の一つなのである。

しかし作者のGalsworthyが、この物語をどういう点に共感して描いているかを考えてみると、同じテーマを扱っていても、その扱い方に大きな違いのあることがわかる。*The Apple-Tree*は、すべて三人称で語られてはいるが、今は48歳になり弁護士としても成功しているAshurstが、26年前の自分の恋愛事件を回想していき、最後にMeganの自殺をこの26年後の時点で知るという構成になっている。もし、'Cousin Phillis'がHoldsworthの回想録として書かれていたら、このGaskellの小説も随分違ったものになってしまったであろう。少なくとも、Phillisに対してHoldsworthが果たした行為——自分の都合でPhillisに近づき、再び自分の利益を守ってPhillisのもとから去っていくという行動——の、客観的な意味は作品において見えにくくなってしまったであろう。自分の行動を客観的に眺めることは、なかなか難しいのである。都会育ちの22歳のAshurstには、Wales生れの、飾らず自然なままのMeganにひかれるだけの理由があるし、その後Meganを捨てると決めた時にも、二人の育った環境の違いが余りに明白で、こんなに住む世界を異にしてきた二人がたとえ一緒になっても、決して幸せは長続きするまい、とAshurstに思わせるだけの根拠がある。つまりHoldsworthと同じ軌跡を示すAshurstの行為は、Ashurst自身の主張によって感傷的に自己弁護されているのである。

確かにGalsworthyは、Ashurstの行為の残酷さを示すために、17歳で自殺したMeganを配している。しかしMeganを自殺へと追いやった原因、つまり*The Apple-Tree*の悲劇の本当の原因は、現実にはAshurstの一連の行為であるはずだが、それが上記のように自己弁護され、是認されているために、このヒロインの自殺は、Ashurstの行為の残酷さを示すというよりむしろ、Meganの哀れさを強調するものになっている。更にAshurstの結婚した女性、今は同じく年を経て43歳になったStellaが、この自殺者Meganの四つ辻に葬られた塚を見つけるという設定によって、若くして恋に殉じたMeganと、25年間Ashurstと一緒に暮らしてきているにもかかわらず彼の心の深淵をつかんでいないStellaという、二人の女性の本質的とは言い難い対照性の方に物語の関心が移って

しまっていると言える。*The Apple-Tree*でも、Ashurstの行為をもっと客観的に見られる人物、たとえばMeganの義理のいとこのJoeの視点を加えて物語が語られたとしたら、Paulの視点で語られている‘Cousin Phillis’と同じく、悲劇が悲劇としての意味を十全に帯びてきたのではないと思われる。Galsworthyの小説には、現代においてもっと読まれてもよい作品が多いと思うのだが、少なくとも*The Apple-Tree*については、短編小説としての特性が美事に生かされてはいるけれど、主人公達の描かれ方に、素直に肯定できないものがある。

このように見てくると、Gaskellの‘Cousin Phillis’には悲劇の原因がいかにも明白に描かれているかがわかる。GaskellはそれがHoldsworthの身勝手さであるとはっきり位置付けている。つまりそれは、人間的な恋愛よりもっと実利的なもの、高い給料や社会での名声や出世を優先させる考え方であり、恐らく自分の行為が他人にどういふ結果をもたらすかさえ自問しない身勝手さである。Gaskellはこの、自分の利益追求を常に何よりも優先させるエゴイズムが、それまで自然とうまく調和していた生活を傍若無人に破壊していく構造を、都市から田舎へと徐々に延びてくる鉄道の敷設という現象を使って見事に描いていると言えるのである。

ところで、‘Cousin Phillis’の悲劇には、このように金儲け中心に開発される鉄道のイメージが、田舎の自然や生活破壊の象徴として使われているという分析に対して、「医者は汽車で来る」と反論されたことがある。しかしこれこそまさに、逆説的のだが、Gaskellの小説の特徴をよく認識させてくれる言い方である。「医者は汽車で来る」ということは、鉄道という文明の利器のおかげで、多くの人の命が救われ、また多くの人々に便利で快適な生活をもたらされたのだということの意味しているだろう。Gaskell自身は、こうした技術の革新や人間社会の進歩そのものを少しも否定していない。それどころかこの点は積極的に認めているのである。エゴイズムを先行させることさえなければ、技術革新が生活の便利さ・快適さと直結することに本来何の矛盾もないはずだからである。ただGaskellの主張していることは、社会が人々の生活の便利さ・快適さを追求する余り、その陰で無視されたり犠牲にされたりする人々がいるということ、もしそういう人々が存在すれば黙っていることはできない、ということだと思う。

まして当時の社会においては、人々の生活の便利さや快適さを追求するというのは名目であって、それはしばしば、産業資本主義の多くのエゴイステイックな行動の隠れ蓑として持ち出されたのである。そういう時代に、たとえば鉄道の担っている破壊的な側面に着目して‘Cousin Phillis’を書いたというと

ころに、Gaskellの洞察力の鋭さを感じるのである。しかもGaskellはそれを鉄道のもつ直接的な破壊性として(たとえばCranford(1851-3)でCaptain Brownが汽車に轢かれてしまうように)だけ示すのではなく、若い男女の恋愛が壊されるという形で、印象深く表現しているのである。

ちなみに鉄道と快適な生活との関わりについて一言すれば、現在ではGaskellの時代と逆に、各地で鉄道の路線が廃止されている。利用者の減少のためと称されているが、その実体は減少した利用客の数では十分な収益がもたらされず、いわゆる採算が合わないということなのである。現に住人の多くは廃止を望んではいないのである。自然を壊し高い犠牲を払って建設されたものが、再び採算性や効率性のために今度は惜し気もなく捨てられていくという現状を見ると、Gaskellが当時の鉄道敷設に付随していたエゴイスティックな側面を鋭く見抜いていたことの重みが一層感じられる。

2

常に社会の中心的な問題と真摯に向きあい、それを小説のテーマに取りあげるといのが終生変らなかつたGaskellの創作態度だつたと思う。しばしば、*North and South*(1854-5)以降、Gaskellは余り社会的な問題に手を染めなかつたと言われる。特に*The Life of Charlotte Brontë*(1857)執筆の体験が、Gaskellに後期の小説の進むべき方向への示唆を与えたと見做されている。実際この時期及びそれ以降に書かれた優れた短編小説は、その多くがManchesterやKnutsfordとは異質な、距離的に遠く離れた地域や外国の話であつたり、時間的に遡つた、地方の伝説や歴史をもとにしたものであつたり、いわゆる幻想的と言える内容の作品であつたりする。しかし様々な素材を用いて描かれてはいるが、こうした時期の小説にも、作品を通してイギリスの現実社会の問題を描くというGaskellの特徴は一貫していると言えるだろう。

たとえば‘My Lady Ludlow’(1858)という、この間に書かれた一番長い短編小説がある。これは大変長いもので、この時代にはいわゆる短編小説というものの確とした定義がなかつたので仕方ないことかもしれないが、‘Cousin Phillis’やCranfordよりも長くて、果してこれを短編小説と呼ぶべきなのかどうか、迷うところである。しばしばnovella、つまり中編小説として扱われている。²⁾またこの作品は構成の点でも複雑で、後に*Round the Sofa*(1859)に収められた時つけられた序文に相当する部分で、語り手がわざわざ次のように断っている位である。自分の語ろうとする物語は全然まとまりのないものになるだろう、始めも真中も終りもなく、ただ思い出すまに語ることになるだろう、

と。この言葉は実際には‘My Lady Ludlow’が仕上げられたあとにつけ加えられた断り書きであるので、これはGaskell自身の、この作品への実感だったと言えるのだろう。

確かに構成は入り組んでいる。小説全体はLudlow伯爵の未亡人Lady Ludlowをめぐる物語である。彼女は夫の死後、自分の両親の領地だったHanburyに戻ってそこに住んでいた。そしてこの領地内で起こる様々な出来事が、時にはLady Ludlow自身の長い語りを交えてMargaret Dawsonという女性によって語られるという筋立てになっている。それも今では老境に入ったMargaretが、若い頃の思い出として聞き手に語ることになっているのである。

この小説は、たとえばEdgar Wrightも指摘しているように、³⁾ Gaskellの作品の中でこれまで軽視されてきているのはいささか公平さに欠けると思わせるだけの、独自の魅力を持った作品であると思われる。が、作品全体の分析は別の機会に譲るとして、ここでは‘My Lady Ludlow’の中で約三分の一を占めている、Lady Ludlow自身の語る一つの思い出話の部分だけを取り上げてみたい。それはHanburyの領地内で農夫の子供達にも読み書きを教えるべきかどうか問題になった時に、Lady Ludlowがその必要性はないどころか、そんなことをすればむしろ害になると言い、かつて自分の身近かに起こったことをその例証としてMargaretに語って聞かせたもので、Lady Ludlowの亡くなった息子Urianの親しい友人だったフランス青年Clémentをめぐる話である。そこで中心になっているのは、フランス革命中に起こった一つの悲劇的なエピソードなのである。

このエピソードでも、取り扱われているのはフランス革命そのものではなくて、やはりこの場合も若い男女の恋愛を通して、あたかも作者の関心は恋愛の成り行きにあるという風に描かれている。

それは次のような物語である。革命前のフランスで、今は亡き侯爵の息子Clément de Créquyは、父方のいとこのVirginieを愛している。Clémentは侯爵未亡人である母親と二人で暮している斜陽の貴族だが、自分の生れに誇りを持った青年で、一方のVirginieは、貴族の誇りよりもその財産に関心のある父親De Créquy伯爵の娘で、彼女自身もRousseauの影響を受けた民主主義者である。従ってこの時点では、Clémentに求婚されたVirginieはClémentを相手にせず、むしろ彼を軽蔑している。そして自分がもし結婚するとすれば、貴族の肩書きによって弱々しく生きている男性ではなくて、その階級が何であろうと自らの長所によって輝いている男性を選ぶ、と答える。

しかしフランス革命が勃発し、状況が一変する。Clémentは一旦は母親と

無事にイギリスに亡命する。しかしDe Créquy伯爵は、普段の言動がどうであれ貴族のせいでは逮捕され、ギロチンにかけられてしまい、娘のVirginieだけがかろうじて逃れて、かつての門番の未亡人Babette夫人のもとにかくまわれる。このVirginieの命が危ないのを知ったClémentは、母親のとめるのを振り切って、Virginieを救うために再びフランスに戻ってくる。ここでVirginieはClémentの愛の深さと勇氣とに遅れ馳せながら気付き、次第にClémentを愛するようになり、こうして二人の恋人はイギリスへ脱出する機会を窺っている。しかしこの間に、VirginieはBabette夫人の甥で、金持ちのワイン商人の息子Morinからも激しく恋されるようになっていく。そして、嫉妬に狂ったMorinによって密告され(この途中で、Morinの身分の低いところが、メモに書かれた文字が読めたばかりに、ClémentとVirginieの脱出計画を見破ったことになっている。そしてLady Ludlowの語る教訓もここにあるのである)、結局この二人の元貴族は逮捕され処刑されてしまう。一方Morinも、最後まで自分を愛入れようとしなかったVirginieの処刑のあと、ピストル自殺を遂げるのである。

この物語にはGaskell自身の他の小説との多くの類似性が指摘できる。たとえばClément, Virginie, Morinという三人の若い男女の恋愛のパターンは、'Lois the Witch'(1859)や*Sylvia's Lovers* (1863)で繰り返されるものである。報われない愛情をヒロインに抱くMorinの姿には、Manasseh('Lois the Witch')やPhilip (*Sylvia's Lovers*)の姿が重なってくるだろう。彼らがヒロインを不幸にするだけの存在ではなかったように、Morinも読者の共感を損なわないだけの性格付けがなされている。

ところでこのエピソードで注目したいことは、フランス革命を背景にしたClément達三人の恋愛において、Virginieを愛する二人の男性が、一人は貴族のClémentであり、もう一人は金持ちのワイン商人の息子で将来父親の跡を継ぐはずのMorinである、という点である。これは*Mary Barton* (1848)において、Maryが二人の男性に愛された時、一人は工場主の息子Henry Carsonであり、もう一人は機械工のJames Wilsonであったことを思い出させる。*Mary Barton*の場合にこの恋愛の構図が当時のManchester社会の基本的な対立を象徴的に表わすものとなっていたように、この'My Lady Ludlow'中のエピソードでも、この二人の男性の階級は、フランス革命の意味を大変象徴的に示していると言える。Virginieが最初、自分がどういう相手と結婚するかを想定して、この二つの階級の男性を比較したせりふを口にしてるので、この二つの対照性は作中で一貫して鮮明なものになっている。またVirginieのこの姿勢は、彼女が将来、Morinその人ではなくてもMorin的な男性、つまりMorinと

同じような階級の男性を愛するかもしれない可能性を示している。そしてこれは、後にMorinがVirginieを愛するようになる時のリアリティを高めることにもなっているのである。

このようにGaskellは、貴族制度が廃止されて共和制になるというフランス革命の本質的な動きを、それぞれの制度の典型的な階級の男性を、対立した位置に配することによって、つまり恋愛を通してうまく表現していると言える。

この点に関連して、やはりフランス革命の時代が背景になっているCharles Dickensの*A Tale of Two Cities* (1859)のことに少し触れて見たい。この小説全体のことでなくて、上に述べてきたGaskellの作品内容と直接重なっている部分についての比較である。*A Tale of Two Cities*では、主人公のCharles Darnay(本名St Evrémonde)はClémentと同じくフランス貴族の青年であるが、彼は革命が起こる前に貴族の肩書きを捨ててイギリスにいわゆる‘亡命’をしている。そして革命後Clémentと同じように密かにフランスに戻るのだが、それはかつての使用人(地所差配人)の命を助けるためである。そして戻ったフランスで、Darnayは彼自身のせいではなくて(というのは彼は自分の相続した領地をすべて革命前に放棄し、もとの地所差配人を通して人民に与えてしまっていたのだから)、彼の叔父に当たる侯爵の残虐な行為のせいで、同じ一族であるという理由で逮捕されることになっている。またDarnayはフランス人の医師Manetteの娘Lucieを愛しているが、Lucieはもう一人の男性、イギリス人の弁護士Sidney Cartonにも深く愛されている。

*A Tale of Two Cities*全体の評価について、及び両作品の間に見られる類似性(他にもClémentやVirginieの監獄での様子とCartonの場合のそれなど)に関わる様々な事柄については、上で断ったようにここでは問題にしない。が、少なくとも全体としてこの小説において、Dickensがフランス革命を、旧体制の悪弊のために起こるべくして起こったものと位置付けていることは明らかに指摘できるであろう。しかし社会のその動きが、この小説の中で主人公達の形象や具体的な行動の上に無理なく表現されているかという点では、大いに疑問に感ぜざるを得ない。この小説ではフランス革命は、主人公達に二つの大都市の間を行き来させ、劇的で複雑な筋を進めていくための、いわば舞台装置としてはうまく使われていると言えるかもしれない。しかしこの時代背景には、それ以上の役割がほとんど与えられていないかのように思える。

ここで再びGaskellの作品に立ち返ってこの点を見てみると、Gaskellは明らかにフランス革命の時期の男女の恋愛を描いている。その中に貴族制と共和制の対立というテーマを、めりはりの効いた構図で表現している。社会の

動きの本質的な部分を、このように小説の主人公達の動きの中に、そして筋の展開の中に不自然でなく描いていくというのは、やはり Gaskell ならではの特徵であると言えるだろう。

更に、'My Lady Ludlow' 中のこのエピソードの教訓は、小説全体の中では最後にいわば逆転されて、Lady Ludlow は領地の住民達の教化政策を認めるというように変わっていく。この時期(1850年代)に、フランス革命に関わるエピソードがそういう形で使われていることも興味深いことだが、イギリス貴族の女性を主人公にしたこの小説において、貴族制の廃止されたフランス革命下での悲劇が重要なエピソードの一つとして使われているということ自体にも、多くの興味深いものが含まれていると言えるであろう。

3

Gaskell の小説の特徴をよく示す作品として、次にもう一つ *Sylvia's Lovers* を取りあげてみたい。ここでも Gaskell は、ヒロイン Sylvia に二人の恋人を配し、この Sylvia の恋愛の成り行きを通して、当時の社会の中心的な問題を描こうとしていると言える。それはこの場合は戦争の悲惨さといったものであるが、この作品でも、そのテーマが決して生の形で描かれるのではなくて、あくまで Sylvia の生き方を通して、Sylvia の間違った結婚を通して描かれている。

これはナポレオン戦争の頃(厳密に言えば、小説はそれより少し前の時期の 1800 年頃で終わっているが)の物語で、York の Whitby をモデルにした港町 Monkshaven が舞台になっている。Sylvia はそこから少し内陸に入ったところの Haytersbank 農場に両親と住んでいる、大変美しい少女で、彼女を愛するいとこの Philip は、Monkshaven の商店の真面目な店員である。Monkshaven は、当時は捕鯨業で栄えており、Sylvia は、捕鯨船の鋸打ち頭をしている勇敢で陽気でハンサムな Kinraid と愛し合うようになる。

'My Lady Ludlow' のエピソードの Virginie をめぐる二人の男性達の関係と同じように、*Sylvia's Lovers* でも Gaskell は、Sylvia を愛する二人の男性 Philip と Kinraid を、大変対照的に描いている。その対照性は、ここでも単に二人の性質や職業や外観等におけるそれにとどまるのではなく、この二人の対照性が小説のテーマと密接に関わってくる、そういう深いものとして描かれていく。

Sylvia と Kinraid とは、Sylvia の母 Bell (彼女は Sylvia に、甥の Philip と結婚してほしいと思っている)の反対を避けるために密かに婚約し、Kinraid は、次の捕鯨のシーズンが過ぎて戻ってくる半年後に Sylvia と結婚する約束をして、航海のために出発していく。ところがその直後 Kinraid は突然行方不明になり、

人々は彼が溺死したと思ひこむ。本当はKinraidはpress-gangに捕まり、連行されて海軍の兵士にされていたのだ。当時イギリスでは、外国と戦争をする時に必要な数の兵士が集まらなると、町や村で兵隊に使えるような男達を捕まえて、有無を言わせず連行していき、軍艦に乗せてしまうという、いわゆる強制徴募(impressment)と呼ばれる方法が許されていた。この時実際に男達を捕まえる部隊が、press-gangと呼ばれた。press-gangは、捕まえた男達をすぐに海軍の兵士として使えるように、特に商船や捕鯨船など、何らかの船の乗組員達を狙っており、そのためにKinraidも捕まってしまったのである。

この強制徴募のことは、イギリス文学においてしばしば取りあげられてきている。たとえば、純粋に文学とは言えないかもしれないが、17世紀のあの有名なSamuel Pepysの日記でも言及されており、彼は後に海軍大臣にまでなった人物だが、そういう彼でさえ、この連行の現場を、痛ましいこととして記述している。

また、*Sylvia's Lovers*と同じくナポレオン戦争の頃を時代背景としたThomas Hardyの小説*The Trumpet-Major And Robert His Brother*(1880)でも、Dover海峡に面した港町Budmouthに近い村でのpress-gangの激しい行動振りが、作品における重要な出来事として描きこまれている。実際、このpress-gangはナポレオン戦争の頃にも特にひどく跳梁したのだ。

ところでKinraidは、人里離れた所で拉致されたために、その現場を誰にも目撃されなかったのだが、ただ一人、偶然そこを通りかかったPhilipだけがその一部始終を見てしまう破目になった。KinraidはPhilipに、見たことすべてを伝えるように、特に何年かかろうと必ず帰ってきてSylviaと結婚するということをSylviaに伝えるように、伝言を残していったのだが、Philipは黙止し、Kinraidは溺死したとSylviaやMonkshavenの人々に思わせておいた。

数年後、press-gangが特に卑怯な手段でMonkshavenの男達を拉致した時、それに反抗したSylviaの父親が逮捕・処刑されるという事件が起こる。Sylviaは、この事件のショックで精神のバランスを失ってしまった母親と生きるために、Philipの強引な求婚をやむなく受け入れて彼と結婚する。このようにSylviaがやむをえず間違った結婚へと進まざるを得なかった背景を、Gaskellは、国の戦争遂行政策による大変残酷な結果として周到に描いている。ここでは勿論Philipの背信が責められるが、彼とてもKinraidが強制徴募によって連れ去られるという事件が起こったからこそそれを悪用したわけで、もしKinraidがpress-gangに捕まらなければ、つまり国が兵士を必要とする戦争を起こしていなければ、Philipにしてもどうにもできなかったのである。それにPhilip

の計算には、当時一旦兵士として連行されたら大部分が戦死をして戻ってはこなかったという重い事実が入れられていたのである。

こうしてSylviaは、やがて生まれた娘と半ば気の狂った状態の母親とのために、Philipとの生活に辛うじて耐えている。そういうところへ、死んだと思われていたKinraidが、Sylviaとの結婚の約束を果たすためにMonkshavenに戻ってくるのである。

*Sylvia's Lovers*はこの時点で一つの山場を迎える。これまでも多くの文学において、死んだと思われていた人物が生還したことをめぐって、様々な物語が作られてきた。古代ギリシアの詩人ホメーロスの『オデュッセイアー』も、そうした物語の一つとして読むことができるだろう。『オデュッセイアー』は勿論、周知のようにギリシアのイタケーの国王オデュッセウスが、トロイ落城後に自国の宮廷へ帰り着くまでの10年間放浪をする、その途上の冒険と帰国の様子が中心に語られるものである。実は*Sylvia's Lovers*は出版当初からギリシア悲劇によく似ていると評されてきた。それは人間の運命というものが、神によっていわば宿命として決められているとする考え方が、Sylviaの悲劇の中に共通項として認められる、ということであろう。ギリシア悲劇ではないけれど、この『オデュッセイアー』でも主人公の運命はやはり神々によって定められるのである。

しかし*Sylvia's Lovers*と『オデュッセイアー』は、もっと別なところで共通項があると言える。つまりイタケーでオデュッセウスの帰りを20年間待っていたペーネロペイアが存在が、Sylviaの姿と重なるのである。Sylviaはペーネロペイアと違ってKinraidの帰りを待たなかったのだから、この二人の女性はむしろ正反対の行動をしたと言えるかもしれない。しかしどちらの物語も、戦争という人為的なものが男達を海外に連れ去り、長い間生死不明のままに本国の人々が待たされる、或いは死んだと思わされるという構造においては、この二つの物語は全く同じなのである。

勿論Sylviaは、Kinraidは溺死したと思いきりこんでおり、彼が戦争に行っていたとは知らなかったことになっている。しかしSylviaの父親Danielは、溺死体のあがったわけではないKinraidの突然の失踪をpress-gangとの関連で考えてみだし、他のMonkshavenの人々も、ひょっとするとそうかもしれないと考える。ただSylviaも含めて人々は、もしそうならKinraidは却って生きてはいまいと思っただけなのである。何故なら以前に一度、Kinraidはpress-gangに捕まるまいと激しく抵抗し、ひどい傷を負ったことがあるので、もう一度そういうことがあった場合もきっと抵抗してその場で殺されてしまっている

だろうと考えられたからである。

そもそも、死んだと思われていた人間が生きて帰ってくるという物語の最も典型的な場合は、戦争時におけるものであろう。実はGaskellは、*Sylvia's Lovers*より前に、戦争とは関わりのない物語として、'The Manchester Marriage'(1858)という短編小説を書いている。この作品では、長い間行方不明になっていて死んだと思われる人物Frank Wilsonは船の一等航海士で、妻Aliceが別の男性Openshawと再婚したあとでイギリスに戻ってくるのだが、Frankは船が難破し、連絡の取れない地域でずっと捕虜になっていて、それまでイギリスに帰ってこれなかったことになっている。こうした事件も、当時は実際に起こり得たことであるだろうが、この場合Gaskellは、はっきりと不可抗力の事件として位置付けて描いている。従って'The Manchester Marriage'において妻のAliceは、Frankが生きていたことも、彼がAliceのもとを留守の間に訪ねてきたことも、彼女が再婚しているのを知ったあと自殺してしまったことも、最後まで知らないことになっている。再婚相手のOpenshawが、そういう深い配慮のできる、読者に好感のもてる人物に描かれていることによって、Aliceの経験する悲惨さがそれだけ軽減されている。

しかし*Sylvia's Lovers*の場合は、一見同じような状況が設定されているけれど、ここではそれは不可抗力のものではなく、先ず戦争という人為的なものの結果起こった悲劇として、位置付けられて描かれているのである。その人為的な戦争が、多くの無力な人々を、今度は不可抗力的に巻きこんで引き起こされた悲劇として位置付けられている。従ってSylviaは、Aliceと違って、Philipと結婚してしまったあとで本当の恋人が生還してくるといふ、大変悲惨な体験をさせられる。つまり戦争がKinraidを連れ去り、彼は運よく戻ってこれるが、しかしそれが残酷なことに、残っている人々を一層苦しめたのである。

こうした物語は多くの小説家達によっても、やはり戦争の大きな悲劇として、様々なパリエーションを通して描かれてきているのである。日本でも、戦後の文学の幾つかにその種の小説を見い出すことができる。

このようにGaskellは、戦争の悲劇を描く場合でも、*Sylvia's Lovers*において、戦争によって多くの人々が殺されるという形で直接的に描くのではなく、死んだと思われていた人間が生きていた場合の物語として、いわばペーネロペイアの立場のSylviaの姿を通して描いていると言える。

更に*Sylvia's Lovers*はこの山場を迎えたあと一転する。Sylviaに激しい怒りと軽蔑を投げられたPhilipは、誰にも告げずに突然家出をする。そして絶望のうちに、たまたま新兵補充に米合わせた軍曹にだまされて、海兵隊の兵士と

して‘志願’してしまう。その後、イギリス軍隊の最下級の兵士の一人として、Philipはあちこちの戦闘に参加させられ、遂には軍艦の甲板で起きた誤爆事故の巻き添えをくい、疾病兵としてひどい姿でイギリスに送り還されてくる。そしてほんの僅かの年金をつけられて、軍隊から追い出されてしまう。この一連のPhilipの描写には、当時の軍隊の大部分を構成していた下級の兵士達の、悲惨な軍隊生活が様々な形で投影されていると言えるだろう。

一方のKinraidは、Philipとは対照的に、軍隊内で大いに出世し、Sylviaのもとへ戻ってきた時には既に大尉になっている。Kinraidはかつて強制徴募された時点で一旦読者の前から姿を消し、Sylviaのもとへ戻ってきたこの時点で再び読者の前にも姿を現わすことになっている。この数年間の空白のおかげで、この間のKinraidに起きた一種の変質が、充分納得させられる形で読者に示される。つまりKinraidは強制徴募された時点では、あんなに激しくpress-gangに反抗した人物、つまり戦争に駆り出されることに抵抗をした人物だったので、今では軍人として出世して戻ってきたのである。

こうして、Kinraid自身も含めて、Sylvia達を不幸に落し入れた戦争の遂行手段である軍隊内で出世していくばかりか、それに何の疑問も感じていない今のKinraidは、*Sylvia's Lovers*において、もはや重要な役割を与えられることはない。それと対照的に、小説の後半部では、軍隊の犠牲者Philipが一層重要な人物としてクローズアップされることになるのである。もともとこのPhilipは、初めから作者によってかなり肯定しうる人物としても位置付けられていた。たとえば、‘My Lady Ludlow’においてClémentがLady Ludlow自身に一貫して誉められているように、Philipは叔母のBellによって常に好意的に遇されている。またPhilipの多くの長所を認めて、最初から彼を深く愛している女性Hesterも、主要な人物として配置されている。そしてそういうPhilipの真価が、Philipがイギリスの軍隊の直接の犠牲者となった時以降、一層強く発揮されることになるのである。

ところでSylviaは、あのKinraidが戻ってきた時、Philipを決して許さないと考えるが、一方でKinraidと出立することをも承諾できずにいた。彼女のこの時の判断は、Kinraidの変質をSylviaなりに察知した結果だったと思われるが、その直観的な判断の正しかったことが、その後のKinraidの行為によって、Sylviaにとっては残酷なことだったが、徐々に証明されていく。つまりKinraidは軍隊内で羽振りがよだけでなく、すぐに別の女性と結婚してしまう。その後Sylviaは、ようやくPhilipの愛の深さに気付き、密かにMonkshavenに戻ってきていた惨めな姿のPhilipと(溺れた娘が救われるという事故のあと)

再会し、そこで二人は和解する。その直後にPhilipは衰弱死し、Sylviaもその数年後に、まだ20代の後半で死んでしまうことになっている。

このような内容を持つ *Sylvia's Lovers* がどのような背景の中で書かれたかを考えてみる時、この小説のテーマの重要性が一層明らかになると言えるだろう。つまり当時イギリスにおいて大変人気のあったクリミア戦争のことをどうしても無視することはできないと思われるのである。*Sylvia's Lovers* が発表された時点ではこの戦争そのものはもう終わっていたが、たとえば Alfred Tennyson があの有名な *The Charge of the Light Brigade* (1854) を発表したように、この戦争は多くの文学者達からも支持されていた。しかし当然のことながら、実際にはこの戦争も、トルストイが『セヴァストポリ』で記述しているように、イギリス側、ロシア側のどちらの側にとっても悲惨なものだったのである。それにイギリスは、これに続いて一連の戦争を遂行してもいたのである。

そしてそういう時期に、Gaskell が、ナポレオン戦争の時代を背景にした戦争の悲劇として *Sylvia's Lovers* を書いたことの意味は、やはり大きいと言えるであろう。

以上、主に Gaskell の後期の小説を中心に見てきた。この時期の作品は、先にも触れたように、一般に社会的な問題が扱われていないと見做されているものである。が、Gaskell はこれらの小説においても、社会の本質的な問題を鋭くとらえ、しかもそれを生の形で描くのではなく、主人公達の生き方を通して、読者の納得のいくように描いていると思うのである。そして作者の、このようなテーマのとらえ方、描き方の故に、Gaskell の小説は読者に大変印象深いものになっているのだと言えよう。

注

- 1) 'Cousin Phillis,' *The Works of Mrs. Gaskell* (New York : AMS Press, 1972), VII, p. 3.
- 2) A Novel として海賊版が出版されたこともある。(See A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell : Her Life and Work* (New York : Octagon Books, 1971), p. 334.)
- 3) *The Gaskell Society Journal*, iii (1989), p. 29.